

ステージ・ピアノ"DEXIBELL/VIVO S9"試奏  
Contemporary Jazz Magazine

# jazzLife

COVER STORY

## 上原ひろみ

新作『Spectrum』発表!

モダン・ジャズ再入門

### ソニー・ステイット & チャーリー・パーカー

「ジャスト・フレンズ」研究

SCORE

ジャスト・フレンズ

ソニー・ステイット & チャーリー・パーカー

ザ・ムーン・ワズ・イエロー

ユタ・ヒップ

いつか王子様が

ビル・エヴァンス

(ジャズ・ドリル)

バット・ナット・フォー・ミー

ジャズ・トランペット入門

【新作特集】

マイク・スターン

シェフ・ローバーとのコラボ作を語る

ランディ・ホール

マイルス「ラバーバンド」が目指したものは!?

ユッコ・ミラー

デイヴィッド・マッシュューズがゲスト参加した新作をリリース

INTERVIEW

ジャズメリア・ホーン

神保 彰

岡崎好朗

松丸 契

LIVE & EVENT REPORT

渡辺貞夫

Shiho

マーカス・ストリックランド

オルケスタ・デ・ラ・ルス

ラリー・カールトン・クリニック

JAZZ GUITAR CONTEST 2019

YAMANO BIG BAND JAZZ CONTEST

10

2019  
OCTOBER

# Ystad Sweden Jazz Festival 2019



**Benny Golson** ベニー・ゴルソン(ts)  
photo by Markus Fagersten

名門「ストックホルム・ジャズ・フェスティバル」に並ぶ、スウェーデンを代表するジャズ・フェスティバル「イースタッド・スウェーデン・ジャズ・フェスティバル」。10回目を迎えた今年は、アメリカからゲスト・オブ・オーナーとしてベニー・ゴルソン(ts)が登場するなど、充実した内容となった。5日間にわたって開催されたこのフェスティバルの様子を、北欧ジャズの第一人者、杉田宏樹がレポートする。

**4 wheel drive**  
(4ホイールドライブ)  
ニルス・ラングレン(tb,vo)  
マイケル・ウォルニー(p)  
ラーシュ・ダニエルソン(b)  
ウォルフガング・ハフナー(ds)  
photo by Kenny Fransson



## アニヴァーサリー・イヤーに 相応しい極上のパフォーマンス が繰り広げられた5日間

### 芸術監督を務めるヤン・ラングレンの 功績で、年々充実したプログラムに

スウェーデン南端の小都市イースタッドで毎年開催されている「イースタッド・スウェーデン・ジャズ・フェスティバル」(以下YSJF)は、今年で10回目を迎えた。芸術監督を務めるヤン・ラングレン(p)の手腕のおかげで、年々充実したプログラムを提供し、老舗の「ストックホルム・ジャズ・フェスティバル」に並ぶ、同国の代表的ジャズ祭へと成長を遂げている。今年の会期は7月31日から8月4日までの5日間で、昨年取材した時に同祭スタッフが予告していたように、節目を記念するにふさわしいラインナップとなった。

ラングレンが独ACTの所属アーティストであるアドヴァンテージを生かして、今回は5組をブックニング。そのトップ・バッターは今年ユニット名のデビュー作を発表した4ホイール・ドライブだった。ニルス・ラングレン(tb,vo)、マイケル・ウォルニー(p)、ラーシュ・ダニエルソン(b)、ウォルフガング・ハフナー(ds)の4人は、全員がリーダー作を制作している点で“ACTオールスターズ”と呼ぶのがふさわしいユニットだ。ザ・ビートル

ズ、ピリー・ジョエル(vo,p)、ステイング(vo,b)、フィル・コリンズ(vo,ds)といった60~80年代のポップスをレパートリーにしたのは、50~60代が中心のメンバーにとってリメイクの食指が進んだからなのだろう。そんな中であって興味深いのは、唯一世代が若いウォルニーの存在。ACTが育ての親と言っているドイツ人ピアニストは、自分がリーダーではなく、他の3人が年長者ということもあって伸び伸びと演奏。ステージ前を出てきてもちゃのハンマーで自分の足を叩く、ベースとのデュオを演じたハフナーのような芸達者もいて、楽しませてくれた。

毎回自身の複数のプロジェクトを加えるヤン・ラングレンは、今年3枚目を出したマレ・ノストラムで出演。リシャル・ガリアーノ(accor, accordina)、パオロ・フレスコ(tp,flh)とのトリオは、国籍の異なるヨーロッパ・オールスターズであり、ラングレンがACTという場所で結び付けたユニット。電気機器を使用して80年代に自分の音を確立したフレスコは、自身の楽器で新しいヴォイスを得た欧州人の先駆者だった。ボタン式アコーディオンの名手ガリアーノは、アコーディナ(吹奏式縦型アコーディオン)を含めたこの楽器の

第一人者。それぞれがリーダー・ユニットを持ち、キャリアも異なる3人が、単発作品のためではなく、12年間も活動を続けてきた要因とは何か。メンバーが提供したオリジナル曲を聴き進めるうちに浮かび上がったのは、3人それぞれが持っているメランコリックな音楽性を凝縮し発展させたのが、このユニットの特色だということ。全員が豊富な経験の持ち主だからこそ可能な音作りに、感銘を受けた。

ポーランドのレシェック・モジジェル(p)、スウェーデンのラーシュ・ダニエルソン(b)、イスラエルのゾハール・フレスコ(per,vo)のトリオは、2005年にアルバム・デビュー。2013年の第4作「ポルスカ」(ACT)は、ポーランドで大ヒットを記録した。表記はモジジェル・トリオではなく3人の連名であり、お互いが対等の関係であることを表明している。ピアノ&ベースがユニゾンで速いパッセージを作ったり、ピアノとベースが同時にソロを取ったりと、楽曲の中にフックを用意。フレスコはスネアやタムの太鼓類がなく、シンバルとパーカッション、およびヴォイスを使うため、通例のピアノ・トリオとは趣の異なるサウンドを生み出す原動力を担った。モジ



**Mare Nostrum**  
(マレ・ノストラム)  
ヤン・ラングレン(p, artistic director)  
リシャル・ガリアーノ(accor, accordina)  
パオロ・フレスコ(tp, flh)  
photo by Harri Paavola



**Cæcilie Norby**  
セシリー・ノービー(vo)  
photo by  
Markus Fagersten

エルが母国の伝統音楽を取り入れて作曲したと思われる、リズムカルな「ポルスカ」が印象的だった。

### アメリカからゲスト・オブ・オーナー としてベニー・ゴルソンが登場

10数組のヴォーカリストが出演した中で、そのハイライトと呼べるのが、4日目23時開演の最終ステージを務めたセシリー・ノービー。90年代にブルーノートから3タイトルをリリースして、一躍デンマークのトップ・シンガーに躍り出たノービーは今年、全員が女性の国際クインテットを起用した新作「シスターズ・イン・ジャズ」(ACT)を発表しており、当夜はピアニストを除くレコーディング・メンバーが揃った。セット・リストはベティ・カーター、アビー・リンカーン、ニーナ・シモンといったジャズ歌手や、シンガー・ソングライターのリッキー・リー・ジョーンズ、ボニー・レイットらの楽曲をカバーした同作の収録曲を柱に、スタンダードや自作曲も加えて、より幅広く構成。気風のいい歌いっぷりや、若手女性バンドを従えた師姉肌ステージ・マナーは、実に堂々としたもので頼もしさを感じさせる。鈴(りん)と壺を叩きながらファルセットで歌った民族音楽的な楽曲では、ノービーの異なる一面を見た。

アメリカからビッグ・ネームを招くのは、地元の音楽ファンに対するラングレンからのプレゼントであるように思える。今年のゲスト・オブ・オーナーはベニー・ゴルソン(ts)。2010年の第1回YSJFにクアルテットで出演し

**Lars Jansson Trio**  
(ラーシュ・ヤンソン・トリオ)  
ラーシュ・ヤンソン(p)  
トーマス・フォネスベック(b)  
ポール・スヴァンベリ(ds)  
photo by Daniel Magnusson



ている90歳のレジェンドは、スウェーデンのノルボッテン・ビッグバンドとの共演という、本祭ならではの企画に臨んだ。ゴルソンがヨーロッパを巡演する途中でイースタッドを訪れたのではなく、当夜のためだけに米国からやってきたというから、これは価値が高い。同国の楽団が事前に準備を整えてフィーチャリング・アーティストのオリジナル曲を共演するスタイルは、昨年のアヴィシャイ・コーエン(tp)&ポー・ヒュスレーン・ビッグバンドの成功例を想起させた。プログラムはゴルソンの代表曲である「アロング・ケイム・ベティ」「ステイブル・メイツ」「アイ・リメンバー・クリフォード」「ウィスパー・ノット」「ブルース・マーチ」の全5曲。ちょっと曲数が少ないのでは?との疑問を埋めるのが、ゴルソンのMC。60年前のアート・ブレイキー(ds)や、ジョン・コルトレーン(sax)のエピソードを、まるで昨日の出来事のように話すと、観客には大受け。「このビッグバンドの全員をニューヨークに連れて行きたいけれど、それはできないのでまた私がここに帰ってきます」と、嬉しい言葉で締め括った。

夏のヨーロッパ・ジャズ祭出演が定例になっているチャールス・ロイド(ts,fl)は、5人編成のキンドレッド・スピリッツで登場。メ

**"ECM-50"**  
Maciej Obara  
"ECM 50"マチェイ・オバラ(as)  
photo by Anna Rylander



**Charles Lloyd**  
チャールス・ロイド(ts,fl)  
photo by Kenny Fransson



ンバーは1ヵ月後の「東京JAZZ」とは異なり、ピアノレスでギタリストがふたり。個性の違うジュリアン・ラージ(g)と、マーヴィン・スウェル(g)を配し、ルーベン・ロジャース(el-b)が電気ベースに徹したことで、ロイドが意図してこのユニットの独自性を追求していることがわかった。

大きな節目の年にあたる独ECMにスポットを当てたECM 50も好企画。トルド・グスタフセン(p)・トリオ、ヤコブ・プロ(g)・フィーチャリング・ミッケルブルグ&ロッシ、マチェイ・オバラ(as)・クアルテットの3組は、2000年代以降のECMアーティストであり、YSJFの見識の高さがうかがえた。パレ・ミッケルブルグの存在感は特筆したい。

テナー・サクソ演奏でも達者なところを見せたジョーイ・デフランセスコ(org, moog syn, tp, ts)、2017年に逝去したスヴェンド・アスムッセン(vln)のシーネ・エイ(vo)らによる追悼プロジェクト、母国の劇場で体感するのが特別だったラーシュ・ヤンソン(p)・トリオ、独NDRビッグバンドとの共演でアフロ・キューバン・ジャズを躍動させたオマール・ソーサ(p, kb)等々、10回目を共に祝った大満足の5日間であった。